

個人レポート

心中の持つ意義―『曾根崎心中』を読んで―

田 中 美 帆

一 はじめに

近松門左衛門の作品の中には心中をテーマにしたものが数多くある。しかし、近世以前の文学作品で心中を扱っているものは見られない。なぜ、彼は十一編もの心中を題材にした作品を残したのかについて興味をもったので、彼の代表作といえるであろう『曾根崎心中』を中心に「心中」とは何かを考えていきたい。

二 『曾根崎心中』概略

女主人公お初は、堂島新天地天満屋の遊女である。もう一方の主人公は醬油屋、平野屋の手代である徳兵衛で、二人は恋仲である。平野屋の主人は徳兵衛の叔父にあたる人であった。徳兵衛にお初がいることを知りながら、叔父夫婦は自分の姪と徳兵衛を結婚させようとする。しかし、徳兵衛の意志は固く、お初のため結婚することを強く拒む。そこに徳兵衛の継母が姪の持参金欲しさに叔父夫婦と勝手に結婚の約束を交わしてしまう。何も知らない徳兵衛は娘を拒むのなら、銀二貫を返せと責められる。やっこの思いで継母から金を取り返したのはいいが、その途中友人、九平次に会い金を貸してくれと懇願され、貸すことにした。しかし、約束の日になっても一向に返してくる気配はなく、叔父に金を返す期

限が迫っている。

生玉の社の境内でことの成り行きをお初に話す徳兵衛の前に九平次が町役人と共に現れる。徳兵衛が貸した金を返せと要求すると「金を借りた覚えはない」と言われ、あしらわれてしまう。証拠を見せようとしても逆に徳兵衛が九平次をだまそうとしていると言いがかりをつけられ、殴られてしまう。結局、金も戻って来ず、無実の罪を着せられた徳兵衛は死ぬことを決意する。そこで、天満屋に行き、お初にも自分と一緒に死ぬ意志があるかを確認し、来世での幸福を祈りながら二人は曾根崎の森で心中を図る。

三 『曾根崎心中』の成立と近松門左衛門

ここでは、近松が『曾根崎心中』を創作するまでの経緯についてみてみる。まず初めに、近松は歌舞伎と古浄瑠璃の二つの芸能を経験していることを念頭に置かなくてはいけない。近松が歌舞伎の世界に腰を据えた時、歌舞伎は見世物から演劇へと変容しつつある時期であった。その過渡期に歌舞伎役者坂田藤十郎という最高の相手を見つけ、歌舞伎の世界の中で地位を占めるようになった。しかし、藤十郎の肉体の衰えとともに近松の歌舞伎に注ぐ情熱も徐々に薄れてきたのだろう。かつての古浄瑠璃の作品を再び創るようになっていった。しかし、古浄瑠璃には伝

統的な「硬さ」があり、それらは劇的な変化を求める庶民にはすぐに飽きられてしまった。頭を抱えていた近松のもとに曾根崎の天神で心中があつたという一報が入った。それは元禄十六年四月に曾根崎の天神で起きた遊女お初と醤油屋平野屋の手代徳兵衛の心中事件である。それを題材に、近松が得意とした義理と人情を盛り込んでストーリー性を出したのが町人の悲劇、『曾根崎心中』である。庶民が中心の聴衆にとって、ひと際興味を惹く演題だっただろう。世話浄瑠璃という新しいかたちの演劇は、たちまち庶民に受け入れられることになった。

四 心中の持つ意義

近松が浄瑠璃を生み出した当時、世間では情死が恐ろしい勢いで世に広まっていた。中世から近世へと時代が変わり、人々の恋愛に対しての捉え方も随分変化したと考えられる。武士中心の社会から、町人中心の社会へ移行してゆき、重苦しい決まりごとは徐々に薄れ始めたのではないだろうか。身分制度が残っていたにせよ、人々は娯楽を求め、ゆるやかな生活をするようになっていった。その日常の中にある、最も身近な娯楽が恋愛だと考えられる。恋をすることによって日々の辛さを忘れその幸福に身を浸す。徳兵衛も例にもれず、恋愛に夢になっている様子が次の表現から窺える。

今は手代と埋れ木の、生醤油の袖した、るき恋の奴に荷はせて、得意をめぐりいく玉の社にこそは着きにけれ。

しかし、恋愛はもちろん幸福なことばかりではない。身分違いの恋など、叶わぬ恋に悩み苦しみ、世を「憂き世」と捉える者たちも多かった。徳兵衛とお初の場合を考えると、二人の身分はそう変わらない。しかし、お初が遊女である時点で一般人としての幸せな恋愛というのは望めないのである。それに加え、徳兵衛は叔父が提案してきた好条件とも言える婚姻の話を断っている。継母のほかに身寄りのない徳兵衛にとって、この縁談は非常に幸運なことであるにもかかわらず、お初との言い交わしを守るためにわざわざ破談にしている。このような点から推察していくと、二人は周囲から忌み、疎まれるような立場であつたと言える。お初から徳兵衛への連絡手段は皆無であり、逢瀬は徳兵衛が直接店に行くしかない。けれども、権力者の叔父との仲も悪くなり、なかなか会うこともできなかったと考えられる。生玉の社で偶然に会った時でさえ、人目を気にし、周囲の人に顔を見せないよう、お初に編笠をとらないように指示する場面がある。

コレおはつぢやないか、これはどうぢやと、編笠を、脱がんとすれば、ア、まづやはり着てゐさんせ、今日は田舎の客で、三十三番の観音様をめぐりまし、こゝで晩まで日暮らしに、酒にするぢやと、贅言ひて、物真似聞きにそれそこ、戻つて見ればむつかしい、駕籠もみな知らんした衆。やつぱり笠を着てゐさんせ。

連絡も取り合うことのできない恋仲の二人の状況は江戸時代においても、尋常ではない。

では、なぜ思いを遂げられない者達は「心中」することを選んだのだろうか。『曽根崎心中』の中では次のような場面がある。

はつは涙にくれながら、さのみ利根に言はぬもの、徳様の御事、幾年馴染み、心根を明かし明かせし仲なるが、それはくいとしほげに、微塵訳は悪うなし、頼もしだが身のひしで、騙されさんしたもので、証挽なければ、理も立たず、この上は、徳様も死なねばならぬしなるが、死ぬる覚悟が聞きたいと、独り言になぞらへて、足で問へば、うちうなずき、足首取つて、喉笛なで、自害するとぞ知らせける。

オ、そのはずく、いつまで生きても同じこと、死んで恥をす、がいではと言へば

ここでは、「証挽がないなら死ぬしかない」「死んで恥をすがないでよいものか」とある。九平次に金を貸した証挽がたたないのだから、死ぬことでしか身の潔白を証明することは出来ないと言ひ、徳兵衛一人で死なせまいとお初と一緒に死ぬことを確認している。

心中の理由の一つに、徳兵衛の汚名をそぐということが挙げられるが、お初自身は名誉を傷つけられたわけではない。お初にとって心中は、純粹に愛を貫き通す行為だったと考えられる。心中とは元来、思う相手に対して誠意を尽くすことであつたので、恋仲である徳兵衛の不名誉を自分のことのように受け取り、ともに死ぬ決意をしたのだろう。

もう一つ念頭に置いておきたいことは、当時の仏教観である。当時「憂

き世」から「浮世」という言葉が生まれたくらいなのだから、現世で満たされない思いを抱える者たちは「来世こそ」と考えていたはずである。冒頭部分には「観音めぐり」の部分があり、大阪の三十三所の観音の霊場を次々に順礼すると罪が消えるとする。つまり、自ら命を絶つことは罪なことであるが、観音様の力を借りて罪を消し、二人の来世の幸福のためならば心中さえも仕方ないことであつたと考えられる。そして、作中には次のように来世とのつながりを暗示するような場面が多々見られる。

この二本の連理の木に体をきつと結びつけ、いさぎよう死ぬまいか。世に類なき死にやうの、手本とならん。いかにもと、あさましや、浅葱染、かゝれとてやは抱へ帯、両方へ引つ張りて、剃刀取つてさらくと、帯は裂けても、主様とわしが間はよも裂けじと、どうど座を組み、二重三重、ゆるがぬやうにしつかと締め、よう絞まつたか、オ、締めましたと、女は夫の姿を見、男は女の体を見、こは情けなき身の果てぞやと、わつと泣き入る、ばかりなり。

心中を図ろうとする二人が腰帯を裂いて樹に体を締めつける場面である。ここでは連理の木に体を括り付け、お互いの絆が裂けないことを確認している。

夫もわつと叫び入り、流涕こがる、心意氣、理せめてあはれなれ。

これは最期の述懐の場面の語りである。この世では叶わぬ恋であるにも関わらず、徳兵衛の呼称が「夫」になっているところに注目したい。この表現から心中をすると決心した段階で、二人の来世の幸福が見えると考えられる。

五 それぞれの存在と役割

ここでは、九平次、お初、徳兵衛の三者それぞれの役割を考えていきたい。先にも述べたように、もともと『曾根崎心中』にはモデルになった事件が存在した。実際の事件では徳兵衛が主人忠右衛門の妻の姪と夫婦にさせられて、江戸の支店に行くことが決まり、またお初は豊後の客に受けだされることが決まったことがきっかけだった。つまり、ここに九平次の立場にある人物は存在しなかったのである。

では、なぜ九平次を登場させたのか。元の事件に取材しているとはいえ、類似点は主な登場人物の名前、職業、年齢のみであり、そのまま事件を使ったわけではない。近松が力を入れて書いたのは、九平次が出てくるところからだと考えられる。そもそも『曾根崎心中』では、九平次に金を貸さなければ、継母から金を返してもらった時点で一件落着となり、二人は心中事件を起こさない。

徳兵衛が心中に追い込まれるまでには、二つの要素が必要である。一つ目は実際の心中事件を基盤としたもので、店の主人の姪と結婚させられそうになるということであり、二つ目は九平次にだまされるということである。一つ目は冒頭部分で書かれ、過去として位置づけられる。二つ目は現在の問題としてここから物語が展開していく。つまり、物語の

展開において九平次は必要不可欠な存在だったといえる。

次に、九平次が登場することによって、物語での立場が面白いように変わるお初について考えてみる。冒頭部分の「観音めぐり」のところでは語り部と中心に、お初の観音めぐりの様子が描かれている。この時点では、お初は女主人公の立場を明確にしている。生玉の社で徳兵衛と会い言葉を交わしている時点でもやはり主人公なのである。しかし、そこに九平次が出てきたことにより、お初はあつという間に何も出来ない傍観者になってしまう。

おはつは裸足で飛んで下り、あれ皆様頼みます、わしが知つたお人ぢやが、駕籠の衆は居やらぬか、あれ徳様ぢやと、身をものがく、せんかたなくもあはれなり。

客はもとより田舎者、怪我があつてはならぬぞと、むたいに駕籠に押し入る、いや、まづ待つてくだんせ。なう悲しやと、泣く声ばかり、急げくと、いつさんに、駕籠を早めて帰りけり。

田舎者の客によつてお初は天満屋に帰されてしまい、ここではお初は無力な存在に変わる。必死に助けを求めるがどうすることもできず、ただ悲しみに泣くばかりである。しかし、場面が夜に変わり、九平次たちが天満屋に来た時、お初は先ほどの恨みとばかり九平次一行に詰め寄る。そして、心中する意志があるかを、縁の下にいる徳兵衛に足で問う。ここでは九平次に詰め寄る強気なお初の姿と、徳兵衛を護ろうとする必死さが伝わってくる。

場面が変わるたびにお初の立場が変わる様子を、早川氏は「女主人公の新しさ」と述べている。主人公から傍観者、そしてまた主人公へと変わり、天満屋の場面ではお初が徳兵衛に心中を促している。このようなお初の様子から、意志が強く、受動的ではなく能動的な新しい女性像が誕生した。お初の存在は、徳兵衛と心中をより強いものとして結び付けたのである。

最後に、徳兵衛について考える。徳兵衛は問題に苦しむ主人公である。その問題は難解であり、すぐに解決法が見つかるようなものではない。九平次の登場により、さらにその問題は解決の見込みがなくなり結果的に心中に至る。ここでの徳兵衛は決して救われることがあつてはいけないのである。なぜなら、最終的に「心中」というかたちが、徳兵衛にとって最も救われるものだと考えられるようにしなければいけないからだ。それと同時に、徳兵衛は心中と直線的に結び付いている存在だといえるので、あくまで悲劇的ではなくてはならないだろう。

以上のことから、まず徳兵衛が物語の中心として存在をし、九平次はそれを展開させより複雑なものへと変えていく。その九平次の存在によってお初の立場が場面ごとに変わっていく。面白いことに最後にはお初に促され徳兵衛は二人で心中することを決意している。

三者にはこのように、それぞれが持つ役割があり、複雑に関係し合ったからこそ、『曾根崎心中』が出来上がったのだと言える。

また、三者がこのような関係で成り立っているのには『曾根崎心中』が世話物であったからだともいえる。町人中心の見物客に共感を持って見てもらえるようにするため、物語でありながら現実世界のような人間関係のリアリティを生み出すためだと考えられる。

六 まとめ

心中事件といえは人々の興味を良くも悪くも惹き付けるものである。元禄時には『心中大鑑』が出版されるほど心中は流行していたが、もちろん心中は堂々と推奨されるべきものではない。

時代の流れとともに人々の恋のかたちも変わってゆき、それに応じるように演劇の題材も変わっていった。心中を題材に扱った作品が数多く残されているのは、時代の流行を敏感に感じ取り人々の興味を惹くことのできた近松の才能があつたからだと考えられる。世話物を書くことによって、思い通りにならない恋愛に悩み、苦しみながらも生きようとする男女の真剣な姿を、温かく見守っていたのではないだろうか。また、実際の事件を演劇にすることにより後世に二人が語り告げられることは、弔いの役割も果たすと考えられる。

『曾根崎心中』は町衆が登場人物に共感し、話の中に引きこまれやすくなっている部分がある。悩みながらも「心中」という決断を下し、来世の幸福を信じ、貫いた彼らの意志の強さは一種の憧れのようなものであつたと考えられる。

恋愛と死、来世での幸福というテーマが複雑に絡み合い『曾根崎心中』は成立している。「心中」は恋愛の手段であり、結論である。そこに向かうことに重点を置き、その中で人間の本质や生きる意味を常に問いかけているのだと考える。

本文引用

『新編日本古典文学全集75 近松門左衛門集②』（小学館、一九九八年）

参考論文

- 早川久美子「『曾根崎心中』成立の意義―世話狂言との比較をめぐって―」
（『日本文学』五六卷、一二月号、二〇〇七年）
大山功「『曾根崎心中』の四つの意義」（『芸能』二六卷、二月、一九八四年）
島居フミ子「近松門左衛門 曾根崎心中の〈お初〉 愛に殉ずる女」（『国文学
解釈と教材の研究』二七卷、九月、一九八二年）

参考文献

- 諏訪春雄『愛と死の伝承』（角川書店、昭和四十三年）
森修『古典とその時代Ⅵ 近松門左衛門』（三一書房、一九五九年）
河竹繁俊『人物叢書 近松門左衛門』（吉川弘文館、昭和三十三年）
武井協三『江戸人物讀本④ 近松門左衛門』（ぺりかん社、一九九一年）
藤野義雄『曾根崎心中』（桜楓社、昭和四十三年）
高野敏夫『恋の手本 曾根崎心中論』（河出書房新社、一九九四年）